様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23　年　4　月　8日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５００５１０
研究課題名（和文）　不登校児の自然体験療法過程における治療的要因に関する研究

研究課題名（英文）Therapeutic factors on truant students in outdoor experiential therapy

研究代表者
坂本　昭裕（SAKAMOTO AKIHIRO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
研究者番号：１０２５１０７６

研究分野：身体教育・野外教育・臨床心理学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学
キーワード：野外教育・自然体験・キャンプ・不登校児・臨床心理・治療的要因

１．研究計画の概要

（1）研究の背景

キャンプ等の自然体験活動は、日常では得がたい実際体験を提供する活動であるが、これまで不登校やひきこもり等の児童生徒への援助アプローチの一つとして活用されてきた。しかしながら、このような自然体験を活用した援助アプローチ（以下、自然体験療法）に関する研究は、その効果を検証するものがわずかに散見されるものの、未だに十分とはいえない。さらに、自然体験療法のいかなる要因が治療的な効果をもたらし、いかに治療的プロセスが進展するのかについては、ほとんど検証されていない。これらが明らかになれば、自然体験療法における有効な介入方法やプログラムの検討に役立ち実践現場への貢献がきわめて大きい。

（2）研究の目的

自然体験療法の特徴である実際体験は、単なる身体的な実際体験にとどまらず「クライエントのあり方を変えてゆくような体験」がなされ、クライエントの内面世界にとって重要な意味をもっている。したがって、クライエント個人の内的体験と治療的効果との関連を検討することが必要となる。クライエントは、固有の問題を抱えていることはもちろん、自然体験療法過程にあっては、それぞれが固有の心の体験をしている。したがって、治療的な要因やプロセスを明らかにするためには、クライエントの固有性に着目した個性記述的研究が必要不可欠である。

このようなことから本研究の目的は、不登校やひきこもり等（神経症、軽度発達障害を含む）の悩みを抱える生徒を対象にした自然体験療法を実践し、それぞれの個別性に着目しながら①治療的要因を明らかにし、②クライエントの体験プロセス（過程）を分析することである。

２．研究の進捗状況

研究の進捗状況は、概ね計画通り進んでいる。具体的には以下の通りである。

（1）自然体験療法の治療的要因

治療的要因は、不登校児へのプログラムの効果を評価し、肯定的効果と治療的要因の関連から検討している。プログラムの効果は、キャンプを体験した不登校児の風景構成法（The Landscape Montage Technique）における描画の構成型に着目し検討を行った。キャンプ体験後に 18 例中 6 例が上位の構成型への変化を示した。自然体験療法は、不登校児の自我発達において肯定的な影響を及ぼすことが明らかになった。また、情動面においても肯定的な影響が示された。長期の自然体験活動を通じて得られた自信の獲得による自己概念の改善が大きな要因となっていることが明らかになった。また、事例研究における検討では、①自然体験療法場面における自由な雰囲気とキャンプカウンセラーの受容的な関わりが肯定的に影響すること。②

登山などの身体的、精神的な限界に迫るような体験は、自己認識や世界認識を変化させる上で有効であること。③グループにおける体験の「振り返り（シェアリング）」が充分に機能するように活用することなどが示唆された。

(2) 自然体験療法の体験プロセス

現在のところ発達障害を抱える青少年を対象に検討している。被験者はプログラムに参加した広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害等の軽度発達障害児 17 名（13.7±1 歳）である。描画法、事例研究から検討した結果、クライエントの中には、プログラム中の社会的行動面における変化と描画との関連が認められた。描画では、クライエントの内面の世界形成（世界認識や世界との関わり）の進展を示していると考えられる。このような世界形成をもたらすような体験プロセスについて分析を進めている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）本研究は、被験者であるクライエントの確保が難しいが、比較的順調に確保できたことがあげられる。また、予算の執行もスムーズで介入プログラムを計画通り実施することができたため。

４．今後の研究の推進方策

上記の通り、研究は概ね順調に進展しているので、当初の計画に沿って研究を進める予定である。これまでは、自然体験療法の肯定的な側面に着目して研究課題を検討しているが、このような療法の負の側面についても検討しておく必要があろうと考えている。何ができて、何ができないのかを明らかにする必要があると思われる。実際、変化が認められない事例も存在し、このような事例の体験プロセスについても検討することが課題であろうと考えている。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 坂本昭裕：からかわれるとカッとなって暴力をふるってしまう中学生男子のキャンプ体験の事例．臨床心理身体運動学研究，12（1），29-40，2010.査読有

② 小田　梓，坂本昭裕：不登校児は長期冒険キャンプ後どのように社会に適応していくのか.野外教育研究,13(1):29-42, 2009．査読有

③ 坂本昭裕：長期キャンプを体験した不登校児の風景構成法の検討-描画の構成型に着目して-．臨床心理身体運動学研究 10（1）：25-40，2008．査読有

〔学会発表〕（計 8 件）

① 坂本昭裕：長期のキャンプが成しえること．障がい者のための国際野外活動フォーラム．財団法人大阪府地域福祉推進財団，2011.2.22，大阪

② 坂本昭裕，小田　梓，渡邉　仁：からかわれるとカッとなって暴力をふるってしまう中学生男子のキャンプ体験の事例．日本臨床心理身体運動学会第 12 回大会，2009．12.13，福岡

③ 小田　梓，坂本昭裕：不登校児の長期冒険キャンプ後の適応プロセス．日本野外教育学会第 11 回大会， 2008.6.15，滋賀

〔図書〕（計 1 件）

① 坂本昭裕：大修館書店,治療的キャンプ．日本スポーツ心理学会編スポーツ心理学事典,2008，637-639.